

在宅での生活期に 「好きなものを食べたい」を支える

食べることが楽しみだという人は多いが、いつしかそうではなくなるケースも。病気、衰え、孤食……。原因はさまざまだが、ときに食の喜びの感覚を取り戻すアプローチも必要になる。食支援は人間の尊厳を支える大きな要素という観点からの、「認定栄養ケア・ステーションぱくぱく」(医療法人アスムス)の取り組みを紹介する。

取材・文 白取 芳樹

しらとり・よしき 編集者として
各種出版物の制作、ライターと
して食支援を中心に介護関連
の取材・執筆に従事。

暮らしを支える医療で 大切な栄養・食の支援

「機能強化型認定栄養ケア・ステーションぱくぱく」(栃木県小山市)は、訪問栄養食事指導(介護保険、医療保険)を中心に地域食堂や栄養講座

講師などの活動を管理栄養士3人でやっている。運営主体はおよま城北クリニックを含め3つの診療所などを経営する医療法人アスムス。およま城北クリニックは、1992年と早くから訪問診療も行っている。

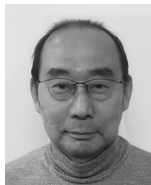
日本で制度的に在宅医療が形作られたのは1986年といわれる。当時の老人保健法の老人診療報酬に「寝たきり老人訪問診療料」が新設。それまでの、患者の求めに応じて不定期に患家を訪問する「往診」が、定期的に行える「訪問診療」として制度化された形になる。このとき、在宅自己注射管理指導や自己腹膜灌流指導管理が医療保険で認められ、以後も在宅に関わる診療料や加算が整備されていった。そして、1992年、第二次医療法改正で「居宅」が「医療提供の場」と位置づけられた。その年に開設したおよま城北クリニックは、訪問診療を行う現在の在宅療養支援診療所の萌芽の時期に早くから訪問診療に取り組んだ診療所である。寝たきりの高齢者への訪問看護ステーションによる訪問看護の開始も1992年で、同クリニックでも開設と同時に開始した。この時代の在宅医療の制度化や普及の背景

には、主に医療的な処置に限られる慢性疾患患者の増加や、在宅医療を可能とする医療技術の発達などがある。

法人理事長であり創設者でもある太田秀樹さんが事業を開始して感じたことの1つは、栄養管理、食事の大切さだった。「病気を治したり悪化させないためには、食事、栄養を摂ることが大切です。でも、訪問診療に行くと、ちゃんとした食事を十分に摂れていない高齢者も少なくなかった。うちの訪問看護師が行くと、米を研いで炊飯器のスイッチを入れ、おにぎりを置いていったりもしていました」と太田さん。そんな在宅高齢者の栄養・食事状況に対応するために、1998年には管理栄養士の岩本佳代子さんを採用し、在宅患者訪問栄養食事指導への取り組みも開始し、歯科医師とも連携するなど、在宅高齢者の栄養・食と口腔の問題にも早くから取り組んだ。

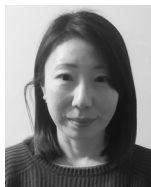
そして、(一社)全国在宅療養支援診療所連絡会事務局長として、調査実施責任者となり、国立長寿医療研究センターとの連携により平成24年(2012年)度老人保健健康増進事業として行ったのが「在宅療養患者の摂食状況・栄養状態の把握に関する調

お話を聞いた人



太田秀樹さん

医療法人アスムス理事長。(一社)全国在宅療養支援協会常任理事。(一社)日本在宅ケアアライアンス業務執行理事兼事務局長。医学博士。医師、介護支援専門員。日本大学医学部卒。自治医科大学整形外科医局長などを経て1992年に「およま城北クリニック」を開業。共著に「『終活』としての在宅医療」(かもがわ出版)など、執筆多数。



岩本佳代子さん

管理栄養士。社会福祉士。介護支援専門員。在宅訪問管理栄養士。日本女子大学家政学部食物学科非常勤講師。訪問栄養食事指導のほか、結城市在宅医療介護連携推進事業コーディネーターを兼任し、誰もが食を楽しめる地域づくりを目指し、地域食堂や多職種勉強会の開催などの地域活動も行っている。



潮田直子さん

管理栄養士。在宅訪問管理栄養士。「機能強化型認定栄養ケアステーションぱくぱく」運営責任者。「介護老人保健施設生きいき倶楽部」で管理栄養士として約20年勤務後、2019年より現職。利用者の想いに寄り添い工夫した介護食レシピに焦点が当たり、NHK「ハートネットTV」に出演したことも(2022年5月13日)。